川柳

横尾　信雄審査員

今回の川柳部門の応募者数は、小学生は178名で16％減、中学生は108名で45％減、高校生は20名で前年並み、一般の部は119名で4％増でした。

特にジュニア部門の応募者数が激減しております。応募の学校が限定されており、文学賞に対する先生方の関心が薄いと推察されます。今後の応募方法を考える時期に来ているのではないかと憂慮しています。

川柳は五七五のリズムで、十七音字で読む定型詩です。川柳の表現は私たちが普通に話したり書いたりしている口語体で、常用漢字、新仮名遣いを用います。そして川柳は、人間を主役として喜怒哀楽を詠み、一句でドラマや小説になるよう読むのです。

また川柳には句の品格が大切です。応募作品の中には、文語体で詠んであったり、単なる語呂合わせの句が見受けられました。情景だけを詠んだ、いわゆる説明句が多数ありました。また中学生の部の応募作品に、当然習っていない句が多数ありながら「中八」の句もありました。清書した後、必ず指を折って確かめることを、習慣にすることをお勧めします。

一般の部

1席｜平川富美子　時事句です。ロシアのウクライナ侵攻とコロナ禍をうまく融合させました。どちらも終息への道は見えてきません。「戦争を止めるワクチン」が今を端的に言い表しました。他の四句も優れていました。

2席｜前田しをり　普段の生活の中の一シーンを、すんなりと平易な言葉で詠んでいます。故郷の母の味噌汁の味は格別なものがあります。お母さんが菜園でつくられた、里芋や玉葱などの具だくさんの味噌汁が目に浮かびます。

3席｜佐藤久仁子　この「わら帽子」の子は、きっと男の子だと想像します。照れ屋でシャイな息子は、帰ってきても寡黙です。ただニッコリしただけで都会へ帰って行きました。母親はそれだけで充分。

第60回記念特別賞｜太田幸江　人生は七転び八起きの繰り返しです。やっとこさの「八起目」は誰かに縋りたいものです。でも大丈夫です。ここつと正直に生きて来られた作者には、神のご加護がある筈です。

高校生の部

残念ながら、1、2、3席と秀句に値する句はありませんでした。

中学生の部

1席｜横田茉里　新型コロナ感染の終息を願った句です。自分の気持ちをストレートに言い表しました。

2席｜古川和昊　SDGs（持続可能な開発目標）は単なる流行語ではありません。より良い世界を作ることに積極的でありたいと願う思いが込められています。

3席｜牟田恋菜　この3年間、コロナ禍で会うことが出来なかった友

との再会です。しかし昔のようにいきません。どこかぎこちないのです。

小学生の部

１席｜森山凛音

お姉さんが初めて育てたスイカを食べた様子が、うまく表現出来ました。

２席｜草場唯月

誕生日のお祝いが待っているのです。飛び起きないわけにはいきません。

３席｜大鋸舞依

夏空に大きなヒマワリが太陽に向かって背伸びをしています。下五の「笑ってる」が良かったですね。